博士論文

（要約）

現代中国における葬儀改革に関する研究－追悼会、火葬、公墓の民族誌的考察

田村　和彦

目次

凡例 4

序章　本研究の目的と方法
1　近現代中国における葬儀改革をめぐって 5
2　中国の葬儀に関する先行研究の整理と課題 6
3　本論文の構成、調査地点および各地の葬儀改革の概況 10
図１　各章の調査地位置図 11
4　各章の概要 16

第1章　現代中国における葬儀改革と人の表象のありかたについて
—殯儀館における「追悼会」を中心に
1　はじめに 22
2　「追悼会」形成への前景 23
3　現代中国を代表する新式葬儀としての「追悼会」 29
4　新たな秩序の揺らぎ 35
5　小結 39
資料１－１　殯儀館の各所に散りばめられた「死の物語」の方向付け 41
資料１－２　「追悼会」の掲示 42
資料１－３　近年の殯儀館における付加サービスの例 43
資料１－４　現在の「追悼会」上の演出設備 44

第2章　火葬装置、技術の普及と労働現場の考察
—新たな技術を受容し、環境を再構成する人々に着目して
1　はじめに 45
2　近代的火葬の受容と普及 46
3　火葬という葬法の中国への導入—上海、北京の事例から— 47
4　殯儀館火葬室で仕事をするということ—情報の共有化— 54
5　火葬炉の操作と「音を聞く」—身体化と環境を再編成すること— 57
6　小結 61
資料２－１　近代的火葬導入の痕跡 63
資料２—２　Ｂ殯葬館の「殯葬サービスカード」 63
資料２－３　初号機火葬炉を操作する火葬班 64
資料２－４　新型火葬炉の身体知に合わせた改造 65
資料２－５　身体に合わせて必要な道具を自作する、別のモノに意味を見出す 66

第3章　公墓をめぐる政策の展開と実践
—地方都市における公墓政策の受容を例として
1　はじめに 67
2　公墓の系譜　ー陝西省における「公墓的なもの」の変遷— 70
3　中華人民共和国における公墓 79
4　調査時点での地方都市における公墓 83
5　小結 88
資料3－1　中華民国期後半の居住民を対象とした公墓と戦没者墓地の混乱 90
資料3－2　C 公墓の外周壁とその外側に広がる「乱埋墳」 91
資料3－3　C、D 公墓の概況比較 91
資料3－4　墓碑にみる埋葬/埋葬予定者の省別分布 92
資料3－5　各公墓における埋葬者の年齢分布 93

第4章　都市部の公墓にみる死をめぐる革命と民間知識の関係
—社会的関節としての公墓案内所
1　はじめに 94
2　陝西省中部 A 市における公墓制度と E 公墓案内所の位置づけ 96
3　公墓の案内にみられる意味共有空間 98
4　小結 106
資料4－1　墓地購入と遺灰委託に必要な費用 109
資料4－2　A 市における火葬の普及と墓地平坦化運動 110
資料4－3　E 公墓案内所のパンフレットに現れる情報と民間知識 111

第5章　農村部における墓碑の普及と「孝子」たち
—死者の記録とその変化
1　はじめに 112
2　立碑運動の展開と背景 114
3　墓碑以外の記録装置—「庸」・「祖宗画」・「族譜」— 116
4　墓碑に刻まれる人間関係の変化—墓碑の大衆化と記載内容の揺らぎ— 121
5　小結 127
資料5－1　研究対象とされた陝西省南部の墓楼 129
資料5－2　耕作を妨げない墓地と現在の農村「公益性公墓」 130
資料5－3　喪に服すべき親族をあらわす九族五服図と墓碑の「孝子」表記 131
資料5－4　近年改めて作成された「庸」 132
資料5－5　調査地周辺の墓碑と成立年 133

資料５－６　埋葬時期と立碑の関係 133
資料５－７　「三周年」儀礼における墓碑の準備と建立 134
資料５－８　Ｆ村落に現存する最古の墓碑 135
資料５－９　1949 年以前の墓碑にみられる埋葬者と「孝子」の関係 135
資料５－１０　1940 年代における関中農村の家庭同居人物の記録 136
資料５－１１　ある戸族の分節と複数の墓碑に表記された人々の関係 137

終章　葬儀改革からみる現代中国における死のありかた
１　本論の要約 138
２　改革諸分野の交差、通底する理念と多様な実践 140
３　社会的関節の視角からみる多様性創出のメカニズム 141
図6-1　社会的関節と葬儀改革、人々の相関モデル 143
４　残された課題と今後の展望 145

補論　陝西省関中地域のある農村における死の儀礼
１　はじめに 148
2　臨終と死の公示 149
３　葬儀の組織と「執客」　死亡の報告と葬儀の準備 151
４　死者の霊魂を守り、喪に服する 154
５　入棺と霊魂の祭祀 157
６　出棺と埋葬、喪があけるまで 161
７　おわりに 165
補論資料-1　「霊壇」と「礼賓先生」 167
補論資料-2　「執客単」(*zhikedan*、「執客」の名簿)上の名称と仕事分担 168
補論資料-3　「倒頭飯」と「長明灯」 169
補論資料-4　棺材に貼られた「牌位」 170
資料補論-5　贈答範囲の記録 171
資料補論-6　「轉飯」に使用される供物 172
資料補論-7　出棺前の「哭」 173
資料補論-8　埋葬を終えた墳墓前で「紙扎」を焼く 174
資料補論-9　埋葬後の祭祀日を示す「做七」表 175

参照文献 176

凡例

（1）本論は 2000 年から 2016 年までにおこなったフィールドワークに基づくものである。ただし、それぞれの地点における調査時期は異なることから、序章において、各章の調査時期を明記する。

（2）注は脚注とする。

（3）図、表は文中で記号を振り、それぞれ各章の末尾に配置する。

ただし、序章の調査地一覧図と終章のモデル図については、文中に表記する。

（4）個人名について、歴史上著名な人物(毛沢東など)は実名とし、その他は匿名とする。

（5）引用については、出典を[ ]で表記する。　例　［渡邊　1991］

引用文は「 」、出典を[ ]、ページは[ ]内に:で表記する。　例　［横山　2005:214］

翻訳や再録により異なる初出がある場合は、先行する数字が直接の参照文献を、後ろに( )で記した数字を初出とする。　例　［羅　2001(1989):413］

同一著者の文章を複数参照する場合は、数字の間に「、」を用いて引用を明らかにする。

例　［森　1999、2001、2002］

引用文献が複数の著者からなる文章の場合は、 執筆者の名前の間に「、」を用いる。

例　［孫、王、董　2013］

（6）現地語(中国語普通話)の表記については、アルファベット斜体を付記する。ただし、声調符号は省略する。

（7）現地用語は「 」で表記する。ただし、頻出するものはその限りではない。

（8）本論で用いる土地面積の単位「畝」は、およそ 6.667 アールである。

（9）本論で表記する現地通貨(人民:CNY)には、調査期間中に大きく変動している。2000 年時点では、1 元およそ 13.01 円であり、2016 年時点では 16.38 円である。本文中では、便宜上、調査期間で平均して、1 元＝およそ 17 円程度とする。

（10）本論を構成する各章の初出は以下の通りである。いずれの既出論文についても再構成、大幅な加筆、修正をおこなっている。

序章　書き下ろし

第 1 章　拙稿(2014a)、拙稿(2014b)

第 2 章　拙稿(2009a)、拙稿(2015a)

第 3 章　拙稿(2006a)、拙稿(2015b)

第 4 章　拙稿(2009b)

第 5 章　拙稿(2010b)

終章　書き下ろし

補論　拙稿(2006b)

序章　本研究の目的と方法

1　近現代中国における葬儀改革をめぐって

近現代の中国では、王朝による支配が終了し、国民国家形成へ向けた模索に引き続き、社会主義国家の成立と繰り返される大衆を動員した運動のなかで、個人の死をめぐる取り扱いにおいても大きな変化が現れた。この変化は後述するように、近年では「殯葬改革」(*binzanggaige*、この死に関する一連の改革制度は時期や主要な対象領域、資料により「礼俗改革」(*lisugaige*)、「喪俗改革」(*sangsugaige*)、「墓葬改革」(*muzanggaige*)と称したが、以下では、全体を通じて時期にかかわらず「葬儀改革」と表記し、引用部位においては必要に応じて当時の表記法を明示する)と呼びならわされている。従来の中国の文化人類学的葬儀研究では、この変動をおもに個別の民間の慣習の叙述、世界観研究、地域社会と国家の関係、そして村落の民族誌における部分と位置づけミクロな政治の問題として読み解いてきた。対して、歴史学的研究においては、より長い時間軸に変化を位置づけ、おもに出来事の連続のなかに国民国家形成の動態を探る方向、新たに発生した衛生観念の普及や植民地化、法制史的視点からの分析が中心となっている。しかし、民間の慣習の変化については、いまだに十分とはいえない研究状況にある。

本研究は、葬儀改革を切り口として、現代における中国の死の処理をめぐる問題を考察する。そのために、まず、現在の葬儀改革における主要な 3 つの領域である、１)「追悼会」(*zhuidaohui*)と呼ばれる新たな儀礼形式、２）1949 年以降は特に無神論の実践として普及した「火葬」(*huozang*)という遺体処理方法、３）血縁に基づかない個人としての視角による公共の墓地「公墓」(*gongmu*)と呼ばれる埋葬方法を取り上げる。それぞれの章では、従来の研究では十分に整理されてこなかった文字資料を含めて現在へと連続する形で一連の方向を整理し、そのうえでフィールドワークによって得られたデータから考察をおこなう様式を採用する。これら葬儀改革の 3 つの領域は、普及時期は異なるものの、それぞれの目標としては、親族、家族を弱体化し、個人を直接国家と向き合わせる「死」を目指す方向で統合され得るものである。この 3 領域を視野に納めることで、従来個別の研究項目とされてきた、「死」に関する政策群と、各種の実践をより大きな文脈に位置付け、新たな議論の場を形成する。一方で、改革の推進のみからは考察できないが、眼前の状況を理解するために必要な議論をそれぞれの章に加える形で、共時的な考察を試みた。具体的には、新たな死の儀礼については商品という文脈を、火葬については従業員の身体性を、墓地の利用者については記憶と旧慣の系譜を、墓地販売者については断片化された民間知識の接合の可能性を、そして、農村部の死の儀礼については人間関係の再編のありかたを加えて行論した。また、本研究の構成上、農村部での葬儀の状況が不明瞭であるため、補論として、調査村落の葬儀に関する報告を加えている。

「先行研究と課題」で指摘するように、中国、特に漢民族の死の儀礼については、豊かな研究蓄積が存在するものの、他方で、これら一連の政策が実践される場についての研究は現

在においても決して豊かな成果を生み出してきたとはいえない状況にある。その理由として、民族誌のなかではこれらの政策が「外部」からもたらされた変化として補足的に扱われる傾向があったことや、現在の葬儀が法規や資格、知識によって細分化され、専門施設の内部で執り行われる密室のなかの出来事となりつつあることが挙げられる。歴史学や死生学においては、その制度的な変遷を中心に取り上げつつも、そこで示された価値のありかたがどのように内面化、あるいは一方向に収斂しない解釈を生み出し、実践を生産しているのかは十分に問われてこなかった。その意味では、かつてクリステル・レーンが指摘した社会主義国家による各種国家儀礼の創造の先の展望はいまだ開拓されているとはいいがたい［Lane　1981］。

本研究では、葬儀場、それに併設される火葬場、公墓案内所と都市部の墓地、農村部の墓地と葬儀といったそれぞれ異なる状況についてのフィールドワークと考察をおこなうことで、当該農村のみ、法令のみといった先行研究の偏重と不足を補うとともに、その文化人類学、歴史学、民俗学の研究群を架橋する形で、一連の問題系を新たな視点から検討することが可能となる基軸の形成をめざしたものである。そのうえで、近現代中国における「死」が、どのように処理され、表現され、経験されることが求められてきたのかを考察する。

2　中国の葬儀に関する先行研究の整理と課題

（要約につき削除　6－10 頁）

3　本論文の構成、調査地点および各地の葬儀改革の概況

上述の先行研究による到達点を回収し不足を補完すること、そのうえで、現代中国における死の社会的布置を考察する新機軸を構築するために、本論文では以下の構成とする。

第 1 章　現代中国における葬儀改革と人の表象のありかたについて
　　―殯儀館における「追悼会」を中心に

第 2 章　火葬装置、技術の普及と労働現場の考察
　　―新たな技術を受容し、環境を再構成する人々に着目して

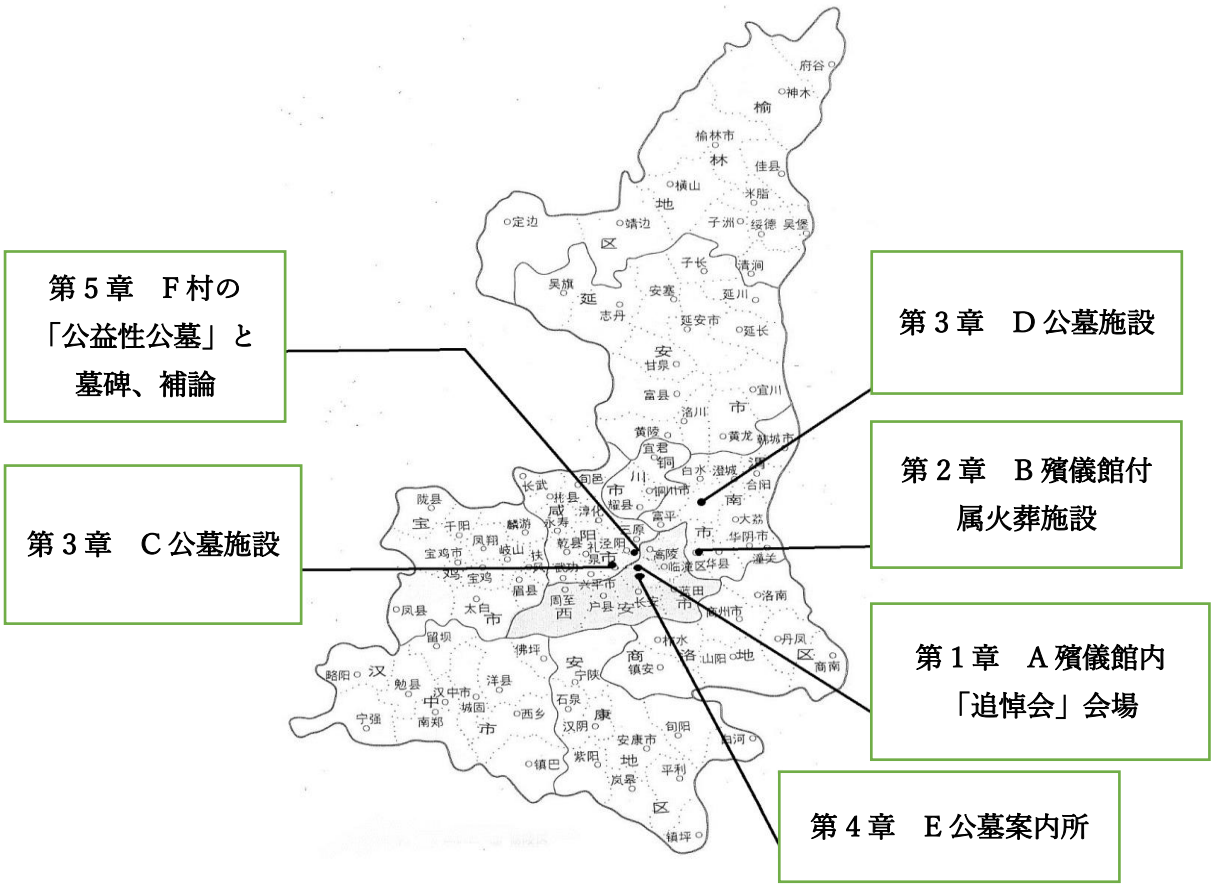
第 3 章　公墓をめぐる政策の展開と実践
　　―地方都市における公墓政策の受容を例として

第 4 章　都市部の公墓にみる死をめぐる革命と民間知識の関係

―社会的関節としての公墓案内所
第５章　農村部における墓碑の普及と「孝子」たち
―死者の記録とその変化
終章　　葬儀改革からみる現代中国における死のありかた
補論　　陝西省関中地域のある農村における死の儀礼

本研究の構成と方法論は、不可分の関係にあるため、現代中国の葬儀改革を検討するために、本章の「各章の概要」において、葬儀改革の３つの主要な項目に対してそれぞれ異なったアプローチをとる理由を説明する。フィールドワークの地点も、殯儀館、火葬現場、商品としての公墓２か所、公墓案内所、農村部の公墓と複数個所にわたるため、変則的ながら、調査地の補足情報は各章で補い、ここでは対象とする地域の概況とそれぞれの地域での葬儀改革の位置づけ、および章ごとの目的について見取り図を記述することとする。

図１　各章の調査地位置図（地図は中華人民共和国陝西省）



※本地図は、陝西省地図出版社［西安地図出版社(編)　1999］をもとに作成した。

本研究が取り上げる主要な地域は、中華人民共和国陝西省の各地域になる。

陝西省は、ほぼ中国の中央となる内陸部に位置し、省内の人口はおよそ 38,350,000 人を擁する西北地域最大の省である［国家統計局（編）　2018］。省の中央部に黄河の一大支流である渭河が流れ、宝鶏、咸陽、西安、渭南といった都市が連なる。渭河とその支流によって形成された中部の平野部は、「関中」（*guanzhong*）と呼ばれ、西周、秦、漢、隋、唐の都がおかれたことでも知られている。この関中平原と、黄土高原が広がる北部の「陝北」（*shanbei*）、四川省に隣接する西南部の「陝南」（*shannan*）と合わせて、陝西省を形成している。本研究は、この関中平原に展開する地域を考察の主要な対象とし、A~F の調査地点はすべてここに位置する。

葬儀改革からみた陝西省は、中国西北地域のなかでは先進的と評価される一方で、全国的には改革の進まない地域として知られる。中国において、高い火葬率を誇る地域は、北京市、天津市、上海市、山東省、江蘇省、遼寧省、吉林省、黒竜江省であって、都市化が進んだ人口密度の高い沿岸部の省と、正確な理由はわからないものの中国東北地域が名を連ねている。民政部によれば、とくに、北京市、天津市、上海市、遼寧省、吉林省、山東省、江蘇省、広東省は、火葬が求められる地区の火葬率（区域内の定住人口数に中国平均死亡率 7 パーセントあるいは当該地域の死亡率を乗じて求めた死亡数で実際の火葬遺体数を割って算出する）がほぼ 100 パーセントに達している［民政部 101 研究所（編）　2010］。同じ時期の、陝西省の火葬が求められる地域の火葬率は、50 パーセント前後で推移しており、これは土葬区も含めた中国全体の火葬率平均とほぼ同じ数値となっている。陝西省の葬儀改革が進まない理由として、省の葬儀改革関連機関職員からは、13 もの王朝があって歴史深度の深い陝西省において死の儀礼を改革することは容易ではない、という声が聞かれる。ただし、1994 年の火葬率がわずか 19.8 パーセントであったことを考慮すれば、本研究で扱う時期に火葬が広く普及している状況をみてとることができる。

第 1 章で対象とする殯儀館は、省都の A 市に所在する。A 市は、2010 年の人口センサスによれば、定住人口はおよそ 8,474,100 人とされる［陝西統計局、国家統計局陝西調査総隊 2012］。この数字は、北京、上海、重慶、天津といった直轄市、沿岸部の省都と比べれば規模は小さいが、西北地域の都市のなかではもっとも人口が多い。A 市は、古都として世界的にも著名であるが、中華人民共和国建国以降は、国営の国防、航空産業、電気機器といった重工業、紡績産業で栄えた。これらの産業が衰退した近年、改革開放期以降は歴史的文化財を生かした観光開発や新技術開発区の設立、生態環境の保全と活用を目指す産業にも取り組んでいる。A 市は、1953 年に建設を開始された西北地域で最大規模の殯儀館を持ち、この殯儀館は、2001 年に国家最高級の格付けを得ている。また、この殯儀館は、「追悼会」施設のほか、火葬場、公墓を併設する一大葬儀施設となっている。付設火葬場は、施設の従業員の説明によれば、最大で年間 16,000 体の火葬を実施できる能力を持つ、という。ただし、すべての火葬炉を常に運用するわけではないため、調査時点では 1 日に 17 体から 20 体の

火葬を実施していた。A 市旧市街 3 地区の火葬率は、2004 年の時点で 90%を超えているが、農村部を含む郊外区では 73%、新たに A 市管轄下に組み入れられたほとんどが農村部から成る地域では火葬率が 30%に満たない地域も存在した。しかし、民政部の葬儀改革に関する報告である『中国殯葬事業発展報告(2010)』によれば、中国全体での火葬率が 2008 年段階で 48.5%であると報告されており、このことを踏まえれば、A 市は、葬儀改革が遅れる陝西省にあって、旧市街地では極めて火葬が進んでいる地域といえる［民政部 101 研究所（編） 2010］。他方で、農村部を広く持つ地域、旧農村部が新たに都市に編入された地域では、火葬率は依然として低い。

A 市殯儀館付設の公墓は、1989 年に拡張整備され、1996 年にはさらに遺骨を安置するためのロッカー式墓地が追加されている。近年では、都市領域の拡大と火葬量の増加に伴い、さらに市街地から離れた郊外に A 市第 2 殯儀館を建設している。

第 2 章で対象とする B 殯儀館付属火葬場は、陝西省東部の B 市に位置する。B 市は、陝西省東部を代表する地級市(*dijishi*、省と県の中間に位置する行政単位)であり、黄河の支流である渭河沿いに所在する。B 市は、およそ 5,289,900 人の人口を擁し、陝西省内では A 市に次いで人口の多い行政単位となっている［陝西統計局、国家統計局陝西調査総隊 2012］。この地域は、古くから山西省、河南省と、陝西省の省都 A 市をつなぐ中継地点として栄え、現在でも中国東部、沿岸部と陝西省をつなぐ交通の要所である。B 市は、2 つの直轄区、2 つの県級市(*xianjishi*)、7 つの県を擁する。市政府は、直轄区の 1 つに置かれており、B 殯儀館付属火葬場もこの直轄区の東郊外に付設されている。

この火葬場は、文化大革命時期に、全国の火葬場建設運動のなかで、火葬施設が形成され、1971 年に設備建設に着手したが、1976 年になってようやく完成するなど、葬儀改革の進展は遅い地域となっている。調査時点での 1 日の火葬量はおよそ 3 体であり、2 つある火葬炉のうち、平時は片方を運用するのみとなっている。この火葬量の低さは、死亡時に火葬が要求される行政区が狭く、この旧市街地を除くと、ほとんどが農村地域となっていることを反映している。調査時点で、土葬の許された農村地域が大部分を占める B 市は、先述の A 市とは対照的に火葬は十分に普及していなかった。

第 3 章で対象とする C 市は、古くは秦の都として栄え、近現代時期には紡績など国営の軽工業を主要な産業とした。C 市は、B 市と同じく陝西省の地級市であり、定住人口は 4,898,400 人と B 市よりも少ないが、A 市との距離が近く、交通路が発達していることから、近年では A 市のベッドタウンとしても機能している［陝西統計局、国家統計局陝西調査総隊 2012］。C 市の殯儀館と付設の火葬場も B 市と同じく、文化大革命末期の 1975 年に建設が開始され、1978 年に完成している。付設火葬場には 5 台の火葬炉を備え、1 日に最大で 25 体程度の火葬が可能となっている。C 市では、葬儀改革の項目のうち、公墓のサービスを充実させており、1994 年には、道路を挟んで殯儀館の向かい側に、70 畝の公墓を形成している。これは、省都 A 市の公墓に次ぐ規模であるが、C 市では都市区が狭く火葬の需要が少ない一方で、市北部から始まる耕作地としては劣る黄土高原に連なる土地を利用し

た結果である。C 市もまた、近年の都市地域拡大政策を受けて、公墓の利用が増えている。

第 3 章で扱う D 県は、行政上 B 市の管轄下にある、定住人口 740,000 人あまりの農業県である［陝西統計局、国家統計局陝西調査総隊　2012］。農業では、陝西省有数の規模を誇り、そのほか、石炭や石灰を産出することでも著名である。総じて、A 市、B 市に比べて、第 3 次産業への従事者が少なく、都市化が進んでいない。D 県の殯儀館は 1979 年に建設に着手し、1982 年には完成していたが、1990 年にいたるまで火葬場の利用者は、217 人しかおらず、施設は十分に使用されていない。その理由として、D 県が農業を主要産業とする地域であり、全地域が土葬可能な地区に指定されていたことがあげられる。文化大革命中の 1976 年には、D 公墓が準備されたが、13 畝あまりの墓域を持つにもかかわらず、調査時点では空き地が目立ち、80 基の墓地があるにすぎなかった。この意味で、A、B、C 市と比べて、葬儀改革が相当程度進んでいない地域といえる。

E 案内所は、A 市内に設けられた、公墓の紹介、斡旋をおこなう施設である。殯儀館やそれに付設する火葬場、荒れ地に設けられた公墓が、郊外に形成されるのに比べて、案内所には利用者への利便性が求められる。そこで、E 案内所は、A 市内の市街地内、具体的には西側城門外の幹線道路が交差する地区に立地している。周囲には、高層マンションとホテルが林立しており、一見したところ葬儀の関連施設があるとは思われない環境に所在する。実際に、この E 案内所も、かつてはホテルとして建てられた建築物を改装して作られている。E 案内所の紹介する公墓は、広く関中平原全体に及ぶが、とくに、A 市、C 市を中心とする中部、B 市を中心とする東部の公墓が多い。なお、E 案内所は 2004 年に設けられたばかりの施設ではあるが、近年、マイカーとインターネットの普及により、墓地選びも案内所の仲介による現地視察ではなく、直接公墓営業者と連絡をとる購入者が増えていること、葬儀の際に殯儀館内の施設で紹介を受けて墓地を購入することが増えていることから、設立当初からその存在意義を問われていた。

第 5 章で扱う F 村は、C 市の行政範囲に属し、その最東端に位置する農村である。2000 年に調査を開始した時点での人口はおよそ 960 人であった。ただし、若者の多くは、高校卒業後は戸籍を残したまま広州や深圳、上海へと職を求めて出稼ぎに出ており、実際に村落に居住している人々はこの数字よりも少ない。現在では、バイクやマイカーで出勤可能な範囲に開発団地ができたことから、村に帰る若者も多くなり、それにともなって戸数も増加している。この村落は、その名称が、F 戸族（戸族は、当該地域における宗族の呼称、人類学が研究対象としてきたよりも狭い範囲で用いられる）の名称と、村落のおかれた地形に由来しているように、F という戸族に所属する人々がもっとも多い。かれらは、この村落の開拓者の子孫たち、と伝えられている。ただし、調査時点での F 村落は、複数の戸族から成り立っており、いわゆる「単姓村」ではない。中華人民共和国建国当初の政治成分の決定において、「地主」、「富農」、「富中農」はすべて F 戸族の人物で占められており、一方で「雇農」は非 F 戸族にしかみられないことから、中華人民共和国建国以前は、F 戸族を中心とする村落であったとみてよい。この村落は、土葬が許可される地域に属しており、自ら火葬を志願

することはない。また、農村であることから、村内の土地に無料で埋葬可能な「公益性公墓」(*gongyixinggongmu*)を有している。このため、日常的な空間を離れて展開する殯儀館での「追悼会」や火葬、金銭を支払って購入する「経営性公墓」(*jingyinggongmu*)については、都市的な出来事とみなしており、実際に、死の処理は、死亡届の提出を除いて、F 村落内及び周辺村落のなかで完結している。

つぎに、現在の中国での死に関する手続きついて説明しておきたい。まず、死亡者が発生した際には、その予想される死因によって対処が異なる。高齢による死亡や既往症による死因が予想される場合には、病院あるいは地域の医療所の医師により死亡が確認され、死亡通知書が発行される。上記の死因にあてはまらない交通事故死などは、司法医師による鑑定を受けて死因を特定したのちに死亡通知書の発行となる。身元不明者らの遺体であれば、公安の管轄となり、医師による死因鑑定の後に死亡通知書が出され、殯儀館に送られて火葬に付される。このようにいずれも死亡後に死亡通知書が作成される点では共通している。

3 つ目の身元不明者の遺体を除くと、死亡が確認されたのちの死者への対応が必要となる。

この対応は、都市を中心とした火葬区と、農村の多くを占める、いまだ火葬の条件が整わないために暫時的措置として土葬を許可する区（「火葬推進区」*huozangtuijinqu*、資料によっては「土葬改革区」*tuzangaigequ*）とによって、対応は分かれることとなる。

土葬が可能な区域であれば、葬儀を実施した後、故人の所属する村落の「公益性公墓」に埋葬する。この農村の葬儀の状況については、補論で詳述する。

一方で、火葬区の住民が死亡した場合、一般的には以下の手続きを踏まねばならない。自宅で葬儀をおこなう場合は、火葬についてのみ殯儀館付設の火葬場を利用するため、まずは、遺体の搬送について殯儀館へ連絡を要する。病院の発行した死亡通知書もしくは派出所の戸籍抹消証明を準備して、殯儀館あるいは殯儀館業務センターへ連絡を取り、遺体の搬送手続きと火葬の予約をおこなう。殯儀館で「追悼会」をおこなうのであればそのホールの予約、殯儀館にて遺体の防腐処置、化粧などの様相の修繕、梱包などの処置を施す。

家庭での死者の祭祀あるいは殯儀館での「追悼会」を終了すると、正常な死因であれば死亡証明もしくは戸籍抹消証明を確認して火葬の手続きをおこなう。

ここまでの過程は、自宅での葬儀か殯儀館での「追悼会」かという差異が認められるものの、遺体の処理すなわち、火葬の実施という点では一元化が図られているため、遺族にとって選択の可能性はきわめて低い。このために、中国では、都市部の火葬区で高い火葬率を記録するようになる。中国全体では、火葬率の統計を記録し始めた 1986 年には、火葬率は 26.２パーセントであったのに対して、火葬の進む都市に牽引されることで 2008 年には 48.5 パーセントにまで上昇している［民政部 101 研究所（編）　2010］。

火葬が終了すると遺灰の処理、安置方法の選択範囲は多様となる。ここでは典型的な事例を 4 つに分類して提示する。現在のところ、もっとも広く利用されている遺灰の処理方法の選択は、多くの殯儀館に付属している遺灰の安置所を利用するものである。安置所の多くはロッカー状の棚を利用しており、１年を１期として一定の管理料を支払うことで遺灰の安

置をすることができる。ここに安置された遺灰は管理料を払い続けることで長期に渡る利用が可能であり、献花や掃除程度の簡易な祭祀活動が可能であるため、これをもって死の最終処理とされることも多い。ただし、遺灰安置施設の多くのが「寄存処」(*jicunchu*)と称するように、原則的には一時的に預かる場所であり、その後の移動について潜在的な可能性を秘めている。2年あるいは3年の保存期間の後に遺灰を廃棄することを明示している施設もある。

次の選択肢としては、遺灰を受け取った後に持ち帰る方法である。といっても、家庭内での祭祀は遺影に対しておこなわれるため、遺灰そのものを最終処理として自宅に収容することは稀である。殯儀館従業員および都市周辺部の観察結果を踏まえると、居住地が火葬区であっても「公益性公墓」に埋葬できれば遺灰を納棺し土葬することが可能であるため、農村部に戸籍のある者は、大部分が骨灰を持ち帰り土葬している。火葬区の農村居住者にとって、火葬推進の政策は旧来の葬送儀礼に「ひとつ手間と出費が増えただけ」となっている。こうした場合、葬儀改革の目的である火葬の実施による出費の削減と墓地の縮小に有効に結びつかないため、民政部門では火葬区の拡大と非合法墓地を含むこれらの墓地の整理を同時進行することでこの問題に対処してきた。火葬を受け入れても遺灰を土葬する可能性が保持されていることには変わりがないが、墓地がどの程度存続できるかについては地方政府の判断によることとなる。ただし、都市に戸籍のある住民であれば原則的にこうした農村部の「公益性公墓」を利用する選択肢はとることができない。

第3の方法として、国有或いは各級の民政局の許可を受けた民間の「経営性公墓」への埋葬が選択できる。埋葬方式は、遺灰の入った容器を直接土地に埋葬する形式を主流とし、そのほか室内外の壁や塔状の施設を利用した、立体的で土地占有率の少ないロッカー形式もあるが(形式に応じて「骨灰堂」(*guhuitang*)、「塔葬」(*tazang*)、「牆葬」(*qiangzang*)、「廊葬」(*langzang*)と呼ばれる)、いずれも 20 年を1期として墓穴の使用権を購入することになる。

第 4 の選択は、政府に推奨されているものであり、葬儀改革の目標にもっともかなった死者の痕跡を残さない方式である。墓域内の樹木の下や芝生、花壇や指定された河川への散骨であって、特定個人のための空間は準備されない。しかし、現在までこの方法の利用者は極めて少ない。その理由は、第3章以降で考察する、故人の記念のありかたに起因すると思われる。

このように、現代中国における死の手続きは、行政的な手続きである死亡証明の段階では共通し、その後は居住地が火葬区と「火葬推進区」とで手続きが大きく分かれ、火葬の場合は、その後の遺灰の安置をめぐってさらに多様化している状況にある。

4 各章の概要

第 1 章の「現代中国における葬儀改革と人の表象のありかたについて―殯儀館における「追悼会」を中心に―」では、「追悼会」という現在の中国に広く普及した新式の葬儀形態について、その形成期から様式の確立を経てゆく過程を検討する。そのうえで、農村部を中

心に相互に影響を受けあいながら異なる形式をもつ葬儀との比較によりそこで目指された死亡自体の意味づけの刷新を検討する。儒教的様式として普及していた死に関する「礼」は、1915 年に始まった新文化運動、1930 年代の新生活運動のなかで、その死者への服喪期間や理由、葬送儀礼に見られる所作の「不合理」性が指摘される。こののちも、死の儀礼の変革は、科学を根拠とする革命や改革が標榜されるたびに、繰り返し「近代化」をめぐる議題として取り上げられてゆく。1949 年以降には、より実際的な手段で積極的な介入が行われ、文化大革命期を頂点としてその後も運動の強弱を経験しながら今日に至る。

従来の葬礼は、共産党政権が延安に拠点を置いた時期に起源をさかのぼる「追悼会」へ変更されることで、無神論的立場から死者の霊魂への祭祀を否定し、死者の社会貢献への顕彰へ置換することが目指されている。これを、本章では儒教礼に代わる新たな、国民国家時期から社会主義国家時期に誕生した死の儀礼として考察する。霊魂の存在否定が徹底されることで、従来の葬儀で見られた様々な所作は大幅に簡略化され、死者との関係を表す喪服に代わる「腕章」の登場や、紙で作られた様々な冥界への贈り物を献花や「花圏」(*huaquan*、竹や葦の骨組みに色紙で装飾された花輪)へと変更することが求められてきた。一時期に比べ死者の社会貢献が強調されなくなった今日でも、「厚養薄葬」(*houyangbozang*) すなわち生前に老人を十分に養い、死後の葬儀は簡易に済ますというスローガンのもと、節葬を目指す方向性は維持されている。

死後の世界といった観念を「迷信」(*mixin*)として否定し、現在の社会への貢献をもって死者を哀悼する儀礼へと変更することは、社会構成員の社会的顕彰という側面を強化するとともに、無神論に基づく死者への「祭祀」や供物の提供といった行為の禁止は、従来の人類学的葬送儀礼研究の重要な論点であった生者と死者の互酬関係を希薄化しているようにみえる。

この第 1 章で取り上げる新式葬儀は、従来の中国の死をめぐる研究ではほとんど取り上げられてこなかった分野であるが、この儀礼の刷新が意図するところは、個人を家族や親族、宗教組織や地域ではなく、直接的に国家に向き合わせることにあり、その意味では葬儀改革の中心的な領域である。ただし後述するように、革命的情熱の退潮と、改革の手法が大衆動員から法規とサービスによる手法に転換して以降、再び家族的な領域が拡大し、また個人化しつつもある。この一部で死が再び私人的領域への回帰する現象を、サービスの消費と、それを可能にする葬儀産業従事者の機能から考察する。ここで言及した葬儀産業従事者については、第 3 章以降での社会的関節議論と呼応している。

そして、本章は、かつて雲南省の墓地改革の事例から示唆に富む問題提起、すなわち「葬礼改革を必要と判断する国家の意図は、人々が家族や友人を弔うために望ましいと考える葬礼のありかたとどのようにうまく折り合いをつけることができるのか」と問うた横山廣子論文への部分的な回答になっている［横山　2005:214］。

「追悼会」の形成時期については主に行政文書を含む文献資料に依拠し、現在の「追悼会」の調査は、第 1 章第 4 節以降は 3 つの殯儀館での予備調査を経て、最終的に中国内陸部陝

西省中央部に位置する施設で実施した本調査に基づいている。調査期間は予備調査を含めて 2002 年から 2016 年まで毎年 1 か月から 2 週間の参与観察をおこなった。

第 2 章では、葬儀改革の 2 つ目の柱である、遺体処理の方法について検討する。中国の葬儀研究に大きな影響を与え、後の標準を作り出したジェイムズ・ワトソンは、1988 年の論考「中国の葬儀の構造―基本の型･儀礼の手順・実施の優位」において、葬礼の研究に比べて遺体処理の方法に関する研究が驚くほど遅れていることを指摘した［ワトソン 1994(1988)］。この状況は現在も変わっていない。続けて彼は、葬礼の手続きが漢民族のなかで多分に画一的であることに比して、遺体処理の方法は多様であることを仮説的に提示したが、少なくとも現在の中華人民共和国においては、第 1 章で検討した新式葬儀がサービスとしての多様性を許容されていることに比べて、遺体処理の方法はより画一的となっている。その理由として、現在の中国が推進する葬儀改革では、都市部から始まって現時点では多くの農村部をその範囲に含む形で葬法を土葬から火葬の強制へと移行させたためである。火葬の重視は、殯葬改革が開始された時期から重視されてきた。1956 年の毛沢東らによる火葬同意書にみられるように、火葬をおこなうことは単に遺体の処理方法を変えるだけにとどまらず、死後の世界を拒絶する思想的立場を表明することを意味した。その結果として、葬儀改革の達成は火葬率の向上を指標により判断される時期を迎えるようになっていた。

現在まで、中国の火葬現場についてはこれがもっとも大きな近現代の中国の死の変化であるにもかかわらず文化人類学、民俗学ともに調査研究の対象とはなっておらず、わずかに公開された葬儀産業従事者の手記などを除いて、専門的知識を持ったスタッフによる密室の内部での作業となっていた。第 2 章では、火葬現場でのフィールドワークの結果、近代的火葬が海外からもたらされた科学技術や設備機器によって可能となったことを史料から跡づけた。同時に、実際の火葬現場では科学知識という言葉が想起させるような普遍性ではなく、むしろ「作業を見る」といった労働現場のインフォーマルな人的ネットワークの活用と、「音を聞く」という作業開始後はほぼブラックボックスと化す火葬炉の内部の状況を読み取る獲得された身体知によって成立していることを明らかにする。そのうえで、従来の身体知にそぐわない機械設備を改造する、全く異なる文脈にあるモノに新たな意味を見出し作業のツールとして活用するなど、作業スタッフの創造性に注目する。この、葬儀改革推進の代理人としての側面と、実際の葬儀という死の処理を社会的に成立させるための葬儀の遂行者としての側面の往復運動として現れる葬儀産業従業者たちこそが、以下の第 3 章および第 4 章の鍵概念となる。

葬法としての火葬については、その導入時期から技術移転に関しては主に行政文書を含む文献資料とし、第 4 節「殯儀館火葬室で仕事をするということ―情報の共有化と環境の改変―」に関するフィールドワークは、2 つの殯儀館での調査を踏まえて、そのうちのひとつについて住み込みの調査をおこなった。2001 年から 2010 年まで夏季に、初年度は 2 週間の調査を、それ以降は毎年約 1 週間の短期調査で得られた資料を基にしている。

第 3 章以降は、葬儀改革の 3 つ目の領域である、墓地に関する改革を議論する。まず、第 3 章において、それまでの親族や同郷といった生前の人的紐帯に基づかない、個人の資格をもって埋葬されるという公墓の成立を検討する。公墓の成立と普及には、中華民国期に新たにもたらされた近代的衛生観念に基づき、都市部に設けられた墓域内の区画を商品として購入する公墓の系譜と、既存の研究では重視されてこなかった国家として烈士を顕彰する公墓の系譜が交差している。前者は中国の近代化をめぐる議論のなかで繰り返し言及されおり、上海の事例を中心に広く知られている。他方で、後者は特殊な記念碑的存在として、戦史や烈士研究のなかで言及されることはあるものの、基本的には別のジャンルとして扱われてきた。本研究では、葬儀改革を死の社会的布置の変革を目指した運動と位置づけ、すでに第 1 章で精神世界の刷新を企図する儀礼創出としての「追悼会」を議論したことから、従来の研究の枠組みでは交差的に取り扱うことのできなかったこれら国家による顕彰にかかる公墓を議論の射程に収めることができる。

この地平から第 3 章後半では、内陸部の地方都市に設置された 2 か所の公墓の悉皆調査に基づき、埋葬者の属性を検討する。この作業から明らかとなるのは、葬儀改革の掲げる目標とは異なり、都市居住者のなかでも近過去に移民として当該地域に定住した人々が農村部の土葬墓を利用できないことによる避難的動機に基づく埋葬地として公墓が機能していること、また、もうひとつの属性として、若年者の埋葬が際立つことである。これらの属性は、周辺部の農村における公墓の事例と比較した際に、浮かび上がる特徴となっている。いずれの属性も、従来の研究では、祭祀継承者が途絶えることで「祖先」から「鬼」へと転換する可能性が高い境界的な存在であり、こうした人々の受け皿として地方都市の公墓が展開している状況を指摘する。この利用者に顕著な傾向性がある状況は、公墓政策が沿岸部の大都市から葬儀改革の進んでいない内陸部の地方都市へと展開している、墓地についての選択可能な段階に現れた過渡期的な状況かもしれないが、少なくとも現地調査の時点では有意な特徴となっていた。

この章では、墓地を死者の最終処理および故人の記録と位置づけて考察した。その結果、1970 年代の重要な諸論考によってほとんど完成したといってよい漢民族の死者儀礼を祖先祭祀との関連で把握する視野からは、男系子孫による祭祀を受けることがない危険な列外者とみなされる死者ついても記念されてゆく現在の中国の現象を解説することを可能とした。

第 3 章の 2 か所の公墓に関して悉皆調査のデータは、2000 年 9 月から 2002 年 5 月までの断続的な訪問調査によっている。その後、第 2 章の調査時(とくに 2005 年 8 月)に収集した、両公墓を管理する殯儀館の従業員に関する情報を補足している。

第 4 章では、先に考察した都市部の墓地の利用状況を踏まえ、墓地という商品がどのように消費されているのかという問題について、公墓案内所でのフィールドワークによる検討をおこなう。故人の死後、火葬を義務付けられている都市部においては、その遺体処理の葬法までは葬儀管理法により厳格に規定される一方で、遺骨の処理をめぐってはいくつか

の選択肢が与えられている。3 年間殯儀館に保管を依頼する、土地を占有する墓地あるいはロッカー式墓地を購入して遺骨を埋葬する、樹木葬や散骨をおこなうなどの処理のうち、もっとも普及している方法は、遺骨の安置場所として墓地を購入することである。この墓地を販売する業者が、葬儀改革の管轄部門である民政局の指導のもとに集合した場所が、公墓案内所と呼ばれる施設である。この施設に常駐する手法で調査した、墓地購入希望者への現地案内と説明、応答、配布される小冊子、接遇マニュアル、従業員へのインタビューで得られたデータをもとに議論を進めるが、第 2 章の火葬をめぐる考察で指摘するように、死の儀礼にかかわる職員は単なる葬儀改革の代理人ではない。民政局の指導下に置かれ、改革の最末端に位置すると同時に、顧客の要望に応じて自らの属する墓地の区画を販売することが求められている。また、顧客と従業員は、多くの場合同一地域の生活者であり、埋葬に関する一般的な知識を共有している。このことから、本章では、公墓案内所で働く職員たちを社会的関節と捉え、この場で展開する民間知識の配分と共有化の問題を取り上げる。本章の結論を先取りすれば、葬儀改革研究で一般的な認識である、改革の普及が妨げられる理由を人々の封建意識の残留に求める説明様式は誤りであることを指摘する。また、特殊な一部の事例を除いて、アンドリュー・キプニスによって提示された改革開放期の農村でみられる死の儀式を含む宗教儀礼の復活が、改革の方針を逸脱することに積極的な抵抗と自己アイデンティティを読み込むことも誤りであることを指摘する［Kipnis　1995、1997］。かつて中国の地域社会と信仰の問題を分析した歴史学者プラセンジット・デュアラは、行政機関と人々をつなぐ経路に「解釈の空間」を設定することでその解釈の多様性を説明しようと試みた［Duara　1988］。デュアラ自身は、近代国家建設における知識人とその言説研究へと向かい、その後この概念を十分に展開することはなかったが［Duara　1995］、第 4 章では、この「解釈の空間」を担う存在として葬儀産業従事者を設定することで、社会的関節議論を補強した。この枠組みを提起することで、従来の研究群にしばしばみられる、法規＝国家／実践＝民間の還元論から逃れ、それぞれ異なる研究分野で蓄積されてきた葬儀に関する法規と、民間知識を運用しつつ改革の末端を担う葬儀産業従事者、そしてそれぞれ個別の死を位置づける必要に迫られた遺族という 3 者関係の中で現在進行する葬儀改革に関する諸現象を考察することが可能となる。この点については、改めて結論部分で触れるものとする。

なお、本章後半部の公墓案内所における調査は、2005 年、2006 年の 2 週間の調査をおこなった。

第 5 章「現代中国における墓碑の普及と「孝子」たち」では、現代中国の一村落における墓地の問題を議論の対象とする。第 3 章後半および第 4 章でとりあげた墓地が、主に都市居住者が購入する商品としての墓地「経営性公墓」であったのに対し、本章では農村部の居住者が利用する「公益性公墓」を議論の対象とする。中国の死の儀礼研究においては、葬儀研究と並んで先行研究の蓄積が非常に厚い分野であり、それらは各地の墓地の形態やささげられる供物や墓前儀礼に関する多くの考察を積み上げており、中国における墓地での活動を理解するうえで大きな意義をもつ。しかし、1950 年代以降の「墓葬改革」の結果とし

て、ほぼすべての村落の墓地は、歴史的に顕彰意義を認められた墓地を除いて平坦化されており、少なくとも調査地周辺においては、現在我々が目にする墓地は多くの場合 1980 年代以降に新たに設置されたものである。本章の主題は、なぜ人々は繰り返し墓地を造営し、そこではどのような人々(「孝子」*xiaozi*)がどういった範疇にある人々を石碑によって記念する、また、記念することが期待されているのかという人々の論理を明らかにすることである。そのために、墓碑による記録に注目し、類似する親族範疇を文字で記録する媒体との比較をおこない、墓碑の記録内容について葬儀改革による変化を検証する。本章の調査とほぼ同時期に広東省の農村で祖先祭祀の調査をおこなった川口幸大は、墓地での祭祀が従前のそれとは同一でないながらも継続している状況を観察し、政策による規制と物質文化の変化によっても彼らが思うところの祖先祭祀の文脈に沿っているかどうか、「譲れないもの」でないかどうかが要点であることを指摘している［川口　2004］。川口の調査事例は 1 例のみではあるが、そこから導き出されたこの指摘は重要である。筆者は、川口のいう「譲れないもの」［川口　2004:46］を基準として、変化の許容範囲と(少なくとも調査時点で)揺るがない根幹を描き出す。この「孝」に基づく範疇の揺らぎは、死の改革により大きな変更を余儀なくされた旧慣としての祖先と家族の関係を、生活実践に依拠しつつ再構築する過程で形成されてきた産物といえる。その結果、ここで検討する範疇は、父系親族と姻族、祖先と祭祀を受けない「鬼」の軸線で研究が進められてきた漢民族の死者と親族の関係性について再考を迫る意義がある。

第 5 章で取り上げる村落調査は 2000 年から 2001 年まで 1 年あまり村落内に共住した時期に実施した。墓碑自体の記録は 2000 年 4 月から 8 月までのデータに基づき、親族関係、墓地に関する対話は 2001 年までの長期調査時期を中心に、その後 2016 年まで継続した毎年の訪問調査により補足、修正している。

終章では、以上の考察から導き出される、葬儀改革の推進、普及下での現代中国における死のありようをまとめている。そこでは、各章で論じた、精神世界の刷新を企図し死と生の価値を明示化する「追悼会」という新たな死の儀礼の創出、火葬という葬法の変化とそこに付加された価値観の改革、家族や地域社会を超えた個人の資格による埋葬場所である公墓の普及は、既存の文化人類学、民俗学研究ではほとんど正面から論じられてこなかったが、その形成過程を文献資料によってたどり、フィールドワークによる微細な視点からの考察をおこなうことで、それぞれの改革が緩やかに相互に重なり合いながら、現在の中国における死という状況が生成されていることを示すことになる。その結果をモデル化し、統合的に理解することが可能な枠組みを提起する。

なお、補論として、改革途上にあった農村部における「土葬」時代の葬儀を示すことで、火葬以後の葬儀改革を相対化するため、2000 年から 2001 年にかけて陝西省中部地域で観察した 11 件の葬儀についての報告を加えている。このことで、現在の中国における葬儀をより立体的に示した。

第1章　現代中国における葬儀改革と人の表象のありかたについて
―殯儀館における「追悼会」を中心に

（要約につき削除　22－44 頁）

第 2 章　火葬装置、技術の普及と労働現場の考察
―新たな技術を受容し、環境を再構成する人々に着目して

（要約につき削除　45－66 頁）

第 3 章　公墓をめぐる政策の展開と実践
―地方都市における公墓政策の受容を例として

（要約につき削除　67－93 頁）

第 4 章　都市部の公墓にみる死をめぐる革命と民間知識の関係
―社会的関節としての公墓案内所

（要約につき削除　94－111 頁）

第 5 章　農村部における墓碑の普及と「孝子」たち
―死者の記録とその変化

（要約につき削除　112－137 頁）

終章　葬儀改革からみる現代中国における死のありかた

1　本論の要約

本研究では、清末以来継続されてきた葬儀改革を通じて、現代中国における死がどのように処理され、進行する改革のなかでどのように人々は死と向き合ってきたを考察してきた。

第１章では､国家によるもっとも直截的な死の意味の表明機会である新式葬儀､｢追悼会｣をとりあげた。そこでは、清末以来、国民国家形成のなかで、従来もっとも日常的で基準となるべき家族から葬儀が切り離され、個人と国家が直接向き合う死の儀礼が創造されていたことを確認した。この儀式は、所与の紐帯を断ち切り、革命を目的として集合した、均質であることが期待された人々によるコミュニティで完成をみた特殊な葬儀であるにもかかわらず、この様式が新たな国民儀礼として普及することが企図された。しかし、中華人民共和国が「人民」概念へと傾き国境内に生きる人々をすべて「国民」としてとりあつかうことに失敗した軌跡と同様に、この新たな儀礼も人々にある程度の均質性が保たれた時代はその意義が認められつつも、改革開放時期になると多様化した人々のありように対応できず、また葬儀改革の制度的な問題に起因して、建国当初の意図は果たされない形で、公的な空間で求められる儀式として緩やかに定着することとなった点を確認した。

第 2 章では、文化人類学的死の研究においてほとんどなされてこなかった、近代的火葬現場のフィールドワークの成果を中心に議論した。近代中国においては、近代的火葬自体は、遺体の搬送が困難な外国人により取られた手段に過ぎなかったが、そもそもヨーロッパで開発された近代的火葬そのもののが、万国博覧会に出品されたように、科学的、合理的、そして衛生的な新たな葬法として登場しており、その後の中国における展開を含み込んだ存在であったことを指摘した。中国共産党が陝西省北部のソヴィエト辺区政府であった時期には設備の必要性から葬儀改革の議論の俎上には載っていなかったこの葬法は、政権を手に入れ、上海や北京、南京といった大都市を手中に収めることで実現可能となる。同時に、遺体を焼却するという旧慣、礼教への強烈な批判行為は、来世を否定し、神霊的存在を否定し、人間の幸福は労働によってのみ訪れるという世界観の表明にこの上ない手段となったことを示した。火葬を受け入れることは、旧思想から脱却し、新たな世界観を手に入れたことを明示する、その人物の思想性を可視化する作用をともなったわけである。そのため、葬儀改革の主要な項目のなかではもっとも遅くに登場したにもかかわらず、火葬は、葬儀改革の浸透を示す指標とみなされていた。しかし、今日の火葬の現場のフィールドワークからは、こうした思想性の表明といった側面とは全く異なる状況が見いだせる。基本的には遺族と直接かかわることのないこの作業現場を考察するにあたっては、技術と設備といった言葉が前提視されているような普遍性は縮小し、葬儀改革という全国画一の政策が、個々人の身体性に支えられていることを指摘した。そこでは、経験に基づいて新たな認知様式が創出され、新規参入者に伝達されている。この認知様式に基づいて、新型の機械設備のもつデフォルトなシステムを否定し改造を加えることで既存の身体知に寄り添わせてしまう、かれら

の形成した作業工程の方便化のために、身体に合わせたモノを創り出す、手に入れた身近な、しかし異なる文脈のモノに新たな意味を与える、といった活動が確認できた。こうした、時に規範すら逸脱する人々の活動によって、火葬という新技術が運用され、葬儀改革が支えられていることを指摘した。

第 3 章でとりあげた公墓の事例は、従来の研究からみれば複数のレベルで逸脱と映るような対象を議論し、それがそれぞれの論理に従って生み出された実践の結果であることを示した。まず、個人の資格によって埋葬される集合墓地の系譜を、中華民国時期に形成された都市部における公墓の系譜と、同時期から激しい内戦、抗日戦争の結果として先鋭化した顕彰系の公墓のそれが交差する形で発展したことを明らかにした。従来の漢民族の霊魂観研究では後者はもっとも忌まれる死の形態のひとつである非正常死の範疇にあたり、一般的な葬儀研究では「鬼」という逸脱例であり「普通の死」とは峻別されてきたが、本研究の提示した死の社会的布置という枠組みでは、両者を同じ視野に捉えることが可能となった。もうひとつの逸脱は、葬儀改革が提唱する墓地の利用推進と、地方都市の公墓における利用者による実際の利用のずれである。実際の利用状況からは、利用者には地域に広く定着する大規模な親族組織といったネットワークを欠如している人々、または、祭祀継承者をもたない、あるいは継承が途絶える可能性の高い若年死亡者の埋葬が有意に多いことが確認できた。この点は、商品としての公墓と、自動的に埋葬資格を得るような村落の「公益性公墓」という選択が可能な状況下での過渡的な現象かもしれないが、少なくとも調査時点での結果としては親族、家庭的親密性と公墓の利用に関連性がみられることを指摘した。

第 4 章では、公墓の販売を担う人々を対象に、購入希望者との相互行為と墓地販売のための小冊子を分析対象として、販売者と購入予定者との間にある民間知識の共有性を指摘した。この知識は決して一揃い民間知識の体系として存在するのではなく、断片化され、いくつかの明示的、暗示的言語によって表現されている。従来、漢民族研究のなかで重要性が指摘されてきた風水だけでなく、購入希望者には合法性、永続性への高い関心がみられた。ここで意味する合法性、永続性は単に購入した商品が無効化されることを恐れる経済原理に基づく判断ではなく、埋葬後に再び墓を改める必要がないことへの強い希求の表現形式である。死者を「正しく」安置することでよき人たることが公墓購入の動機として強く作用しており、礼教の旧慣を再編しながら新たな行為基準「孝」が紡ぎだされる状況を指摘した。

第 5 章では、農村部の墓碑建立運動を対象とし、墓碑に結集する人々である「孝子」について議論した。よく知られるように、中華人民共和国以降、とくに農村部では農業合作社形成以降、人間関係の大規模な再編が求められた。この時期以降、文化大革命の終了まで、繰り返し親族、家庭は再編の対象として大きな介入を受けてきた。改革開放時期になると、この再編を経た人間関係のうえに新たな関係性が再度構築されねばならなかったが、墓碑への記名をめぐって表現される親密性である「孝子」においてもこの影響をみることができる。1990 年代以降のある村落でみられた「孝子」の範囲を再定義する揺れ動く状況を指摘した。この村落の墓碑は、個々人がそれぞれに建立するためにその範囲は同一ではないが、1949

年以前の墓碑と比べて、記載される「孝子」の範囲が拡大している。しかし、無軌道に拡大するわけではなく、女性、傍系親族をめぐる領域で拡大し、その一方で離婚、再婚により距離化が進んだ人物が記載されないなど、その範囲は墓碑建立の際の状況で顕在化した人々の論理を反映させていることを指摘した。かつて、父系親族集団として、その他の日常的な親密性を排除する形で記名されてきた墓碑の「孝子」は、中華人民共和国成立後の一時期、そのモデルを失い、現在はその再構築過程にある。このなかで、日常的な親密性に基軸を置く「親しい人々」を核に墓碑の記名が形成されていると考察した。

各章では、異なる対象、調査地点を扱いつつも、現代中国における死のありかたをめぐって、ときにスローガンや碑文など明確に、ときに公墓の売買交渉などその場限りで消え失せるミクロなやりとりのなかにあらわれる複数の人間像と「正しさ」について議論してきた。

2 改革諸分野の交差、通底する理念と多様な実践

本研究では、一連の改革群である「追悼会」、火葬、公墓について、統合的な視野から改めて整理することで、提唱、実施された時期や現場となる地点、普及の力点には差異があるものの、これらの諸改革には通底する理念があることを明らかにした。「追悼会」の弔辞と各種の発話、参列者の序列、殯儀館や公墓に掲げられる標語、火葬の意義、公墓の購入資格と顕彰など、葬儀改革の場の基調をなす通奏低音とは、如何なる死に価値があり、翻って如何なる生を送ることが要請されているのかという、「人」のありかたをめぐる意味の表明であった。この人のありかたに関する国家モデルは、時期により強弱の差はあれ存在しており、社会改革への熱情が強烈に形成される時期には葬儀改革の貫徹が求められてきた。清末の一時期、中華民国期の 1930 年代、辺区政府の 1940 年代、中華人民共和国建国期、大躍進運動時期、文化大革命期には、ありうべき人間像の希求とともに、葬儀改革は力点を移動させながら反復されていることを確認した。よって、ある時代のみを取り上げ、その基点の前後で変化を議論してきた中国の死の儀礼研究の多くが、理解枠組みとして大きな限界を含んでいることを本研究から指摘することができる。むしろ、国家による葬儀改革は、儀礼、遺体処理方法、埋葬地点はそれぞれに連動し、葬儀改革の変奏曲として全体を構成し、現在の死の社会的布置を形作ろうとしていると捉えることが有効であろう。

また、日常的には沈潜しているものの、多くの人々にとって普段はかかわることのない死をとりあつかう施設に近づくほど、この理念は明示化される。「追悼会」、火葬場、公墓の公的な側面で発せられる人のありかたに関する国家モデルでは、家族や友人、隣人や同郷者といった自己を取り巻く関係性を超越して、直接に個人と国家が向き合い、常に自己の思想や行為について内省を繰り返す存在として人間像が設定されている。この点で、良き父、母であり、睦まじい夫婦であり、隣人関係を良好に保つなど、他者との関係性において評価される、村落の墓碑に刻まれる理想的な人間像とは大きく隔たっているように映る。

葬儀改革が顕在化させる規範が明確であるその一方で、実際の葬儀の場においては一様ではない状況を呈する。各章でとりあげた、「追悼会」での礼砲や天蓋といった新たな項目

の創出、公墓案内所における小冊子の文言や墓地購入希望者への売り込み、墓碑製作者による「孝子」範囲の拡大に対する黙認などを想起すれば、商品としての文脈において死の処理に付加されるサービス、一度限りの故人の死をよりよく演出し遺族の困難な状況へ寄り添おうとする心情を仲介することで、実際の死の表現はある程度の幅をみせ、そのなかから新たな標準を生み出してきた。改革の提示する規範のみでは、個別具体的なそれぞれの死に対応できないことは、一見ルーティーンの連続と思われる火葬の現場においてもおこなわれていることを第 2 章で確認した。そこでは、火葬班の従業員は、具体的な死に合わせて燃焼時間を読み作業全体を統御するために、「殯葬工作サービスカード」の情報と、他の部署の職員との雑談などインフォーマルな情報を駆使して、死の処理と向き合っていた。この個性ある死を取り扱うことと、1990 年以降、殯儀館や公墓で新規のサービスが陸続と誕生し、一部が新たな標準となったことは決して偶然ではない。改革開放の時期を迎えた中国においては、「単位」による社会統制が緩み、一部の人々が「単位」による最後の福利としての葬儀を期待できなくなった。改革開放政策が浸透してゆく時期から現在まで、人々の生活が多様化したことが死の儀礼の変容にも関係している。同時に、この時期以降、政府機関である民政部門にも改革がおよび一定程度の採算性が求められるようになっていった結果として、新たなサービスを考案する土壌を形成した。本研究の依拠する現地調査の時期はちょうどこの時期にあたり、画一的な国家政策としての葬儀改革の理念の側面と、多様な各現場の状況を記述することとなった。

旧慣を批判し新たに樹立された規範の緩和は、様々なレベルの文化要素をパッチワークすることで眼前の死を位置づける枠組みを再構築しつづける端緒となる。旧来の孝服を着用したうえで黒紗の腕章を取り付ける、毛沢東の「為人民服務」と「二十四孝」の説話を組み合わせて「追悼会」のグレードの異なるホール選択を促す、「孝子」の範囲を拡張しより理想的な大家族を演出するために墓碑を改めて作り直すなど、枠組みの再構築の事例は無数にあるが、本研究では、政府の葬儀改革によってもたらされたものであろうと、伝統を想起させるようなものであろうと、行為に方向性を与えるためには、それが超えられない基準に触れない限りは同じ水準で資源化されている状況を考察した。ただし、この基準全体も現在に至るまで様々な揺らぎをともなっていることを、同時に示してきた。このありかたをより的確に捉えるために本研究では、国家の変遷を重ねてきた葬儀改革の理念と、民間の死への処理のありかたという両者を競合的関係ではなく、その実施空間により強弱はあるものの、それらが相互に浸潤しあいながら実際の死が処理される状況を検討した。

3 社会的関節の視角からみる多様性創出のメカニズム

（要約につき削除 141－145 頁）

４ 残された課題と今後の展望

（要約につき削除 145－147 頁）

補論　陝西省関中地域のある農村における死の儀礼

（要約につき削除　148－175 頁）

参照文献

< 日本語・中国語 >

石井良次　2005「イギリス火葬協会の誕生と年次大会(2005 年)について」、火葬研究協会(編)『火葬研究』9 号、火葬研究協会、pp.47-48.

石井良次、八木澤壯一　2007「イギリスにおける火葬場および火葬炉などの変容について」、火葬研究協会(編)『火葬研究』11 号、火葬研究協会、pp.36-39

ヴォヴェル、ミシェル(富樫瓔子　訳)　1996(1993)『死の歴史-死はどのように受けいれられてきたか』創元社(初出は *L'heure du grand passage chronique de la mort*、Gallimard)

エブリー、パトリシア＆ワトソン、ジェイムズ(川口幸大　訳)　2006(1986)「王朝時代後期中国における親族組織・序文」、瀬川昌久、西澤治彦(編)『中国文化人類学リーディングス』、風響社、pp.153-167(初出は、Ebrey, Patricia and Watson, James, Introduction, Ebrey, Patricia and James, Watson(eds), *Kinship Organization in Late Imperial China,1000-1940*, University of California Press)

延安解放日報社　1941　『解放日報』(6 月 26 日 2 版)

延安解放日報社　1941　『解放日報』(8 月 15 日 2 版)

王暁葵　2005「二〇世紀中国の記念碑文化―広州の革命記念碑を中心に」、羽賀祥二ほか(編)『記録と記憶の比較文化史』、名古屋大学出版会、pp.234-270

王綏鑫、陳岳良、張祖高、関維常、陳婷婷(整理:方虹)　2006「那時、我們如此推行火化」、朱金龍(主編)『殯葬文化研究』39 期、殯葬文化研究編集部、pp.30-34

王培玉　1986「景村的揺銭会及孝義会」、中国人民政治協商会議陝西省洛南県委員会、文史資料研究委員会(編)『洛南文史』4 輯、pp.53-54

王夫子　1997『殯葬文化学―死亡文化的全方位解読(下)』、中国社会出版社、pp.592-606

郭存亮　1992『白事博覧』、中国社会出版社

岳慶平　1994『中国民国習俗史』、人民出版社

何慶雲　1971(1933)　『陝西実業考察記』、文海出版社

革命公園史編纂委員会（編）　不明　『革命公園史』、未出版

何彬　1995『江浙漢族喪葬文化』、中央民族大学出版社

――　2013『中国東南地域の民俗誌的研究―漢族の葬儀、死後祭祀と墓地』、日本僑報社

川勝守　1990「東アジア世界における火葬法の文化史―三～十四世紀について」、九州大学文学部東洋史研究会(編)『九州大学東洋史論集』18 号、pp.1-34

――　1999「明清以来、江南市鎮の共同墓地・義塚の社会文化史―蘇州・嘉興・湖州・杭州四府を中心として―」、大正大学(編)『大正大学研究紀要』(人間学部・文学部)84 巻、大正大学出版部、pp.12-23

川口敦司　2001『広東族群撿骨重葬習俗的人類学研究』未出版、中山大学博士論文

川口幸大　2004「共産党の政策下における葬送儀礼の変容と持続―広東省珠江デルタの事

例からー」、日本文化人類学会(編)『文化人類学』No.69Vol.2、pp.193-210
――　2013『東南中国における伝統のポリティックス―珠江デルタ村落社会における死者儀礼・神祇祭祀・宗族組織』、風響社
闞玉香　2010「北泉議礼及其成果―《中華民国礼制》」、南華大学学報編纂委員会(編)『南華大学学報(社会科学版)』第 1 期、pp.50-53
韓恒　2002『規則的演変：対豫南 G 村喪葬改革之実証研究』、中国人民大学修士論文、未出版
韓敏　2007『回応革命與改革―皖北李村的社会変遷與延続』、江蘇人民出版社
咸陽県人民委員会民政科　1958「積極開展墓葬改革工作的通知」会議第 128 号
咸陽市民政局、咸陽市地方志辦公室(編)　1993『咸陽市民政志』、咸陽市民政局
咸陽市地方志編纂委員会(編)　2000『咸陽市志四　文化巻』、三秦出版社
木崎翠　1994「現代中国の埋葬と墓葬―北京市の事例」、小島麗逸(編)『アジア墳墓考』、勁草書房、pp.72-82
屈明伸　1985「商県旧日民間経済互助形式―納銭会及其他」、陝西省商県委員会、文史資料研究委員会(編)『商県文史資料』3 巻、pp.56-62
厳昌洪　1998「民国時期喪葬礼俗的改革與演変」、中国社会科学院近代史研究所(編)『近代史研究』第 5 期、中国社会科学院近代史研究所、pp.3- 5
――　2002「20 世紀 30 年代国民政府風俗調査與改良活動述論」、華中師範大学学報編纂委員会(編)『華中師範大学学報(人文社会科学版)』第 6 期、華中師範大学、pp.71-77
江文君　2012「祖先・家族・葬文化」上海濱海古園葬文化研究所(編)『濱海論叢』、上海濱海古園葬文化研究所、pp.69-75
国家統計局(編)　2018　『中国統計年鑑（2018)』、中国統計出版社
国家統計局社会統計司(編) 1990『中国社会統計資料(1989 年版)』、中国統計出版社
――　1994『中国社会統計資料(1993 年版)』、中国統計出版社
国家文物局(主編)　1998「陝南墓楼碑」『陝西文物地図集　陝西分冊(上)』陝西地図出版社
胡適　1919「我対於喪礼的改革」、『新青年』6 巻 6 号、pp.567-577
小島麗逸　1994「中国―墓革命いまだならず」、小島麗逸(編)『アジア墳墓考』、勁草書房、pp.34-51
胡民新ら(編)　1995『陝甘寧辺区民政工作史』、西北大学出版社
左永仁　2004『殯葬系統論』、中国社会出版社
上海殯葬文化研究所(編)　不明「為了涅槃中的緑色―小記上海宝龍火化機械研究所創業過程」、上海殯葬文化研究所(編)『飛思風采―上海市殯葬服務中心創建文明行業新風録』、上海殯葬文化研究所、pp.234-245
上海殯葬文化研究所(編)　2002『2002 上海市殯葬服務中心殯葬年鑑』、上海殯葬文化研究所
上海民政志編纂委員会(編)　2000『上海民政志』、上海社会科学院出版社
周吉平　2002『北京殯葬史話』、北京燕山出版社

朱金龍　2001「上海殯葬業的沿革」、朱金龍(主編)『2001 年上海市殯葬服務中心殯葬年鑑』、上海殯葬文化研究所、pp.353-367
邵先崇　2006『近代中国的新式婚喪』、人民文学出版社
徐暢　1999「近代中国農村的喪葬互相組織」、山東大学『民俗研究』編輯部(編)『民俗研究』2 期、pp.56-57
秦暉　1999(1993)「封建社会的“関中模式”―土改前関中農村経済研究之一」、『耕耘者言』山東教育出版社（初出『中国経済史研究』第 1 期）
――　2001(1995)「関中模式的社会歴史淵源：清初至民国―関中農村経済與社会史研析」、楊念群(主編)『空間・記憶・社会轉型―新社会史研究論文精選集－』、上海人民出版社、pp.309-345（初出『中国経済史研究』第 1 期）
秦暉、蘇文　1996「羌笛声中楊柳怨―旧関中小農社会分析」、『田園詩與狂想曲―関中模式與前近代社会的再認識』、中央編訳出版社
秦兆雄　2005『中国湖北農村の家族・宗族・婚姻』、風響社
瀬川昌久　1996『族譜―華南漢族の宗族・風水・移住―』、風響社
石大訓、来建礎　2004『葬式概論(殯葬学科叢書)』、中国社会出版社
薛理勇　2000「上海喪儀的変遷」、施福康(主編)『上海社会大観』、上海書店出版社、pp.159-164
陝西革命先烈褒恤委員会（編）　1990(1949)『西北革命史征稿』、上海書店
陝西省地図出版社(編)　1999『陝西省地図冊』、西安地図出版社
陝西省地方志編纂委員会（編）　2003『陝西省志第五十三巻　民政志』、陝西人民出版社
陝西省檔案館、陝西省社会科学院(編)　1991『陝甘寧辺区政府文件選編』第 10 編、檔案出版社
陝西省統計局、国家統計局陝西調査総隊　2012『陝西統計年鑑（2012)』、中国統計出版社
陝西省民政庁(編)　2002『陝西省民政行政執法手冊』、非出版
孫樹仁、王丹、董希玲　2013「当代社会生死観研究報告―基於殯葬改革“回潮”及周口平墳與情嘩然的反省」、民政部一零一研究所(編)『中国殯葬事業発展報告(2012～2013)』、社会科学文献出版社、pp.211-231
胎中千鶴　2008『葬儀の植民地社会史』、風響社
武田至、八木澤壯一　2008「中国に於ける火葬炉の理論と操作マニュアルについて」、火葬研究協会(編)『火葬研究』12 号、火葬研究協会、pp.20-23
武田昌雄　1989(1935)『満漢礼俗』、上海文芸出版社(影印本)、(初出は金鳳堂書店)
田村和彦　2001「陝西省関中平原における葬儀」、愛知大学国際コミュニケーション学部比較文化学科(編)『戸県農民の生活と文化』、愛知大学国際コミュニケーション学部比較文化学科、pp.140-162
――　2003「国家政策と漢族の葬儀」、渡邊欣雄(編)『アジア遊学:路地裏の宗教』No.58、勉誠出版、pp.24-35

——　2004「本地宗族との関係からみた外来戸の移住について-陝西省関中平原地域の村落に関する事例報告-」、白山人類学研究会（編）『白山人類学』No.7、pp.15-47
——　2006a「中国の葬儀改革にみる連続と変容―地方都市における公墓政策の受容を例として」、愛知大学現代中国学会(編)『中国 21』Vol.25、風媒社、pp.159-184
——　2006b「陝西省中部地域における死の儀礼―漢民族の葬儀に関する人類学的報告―」、愛知大学国際コミュニケーション学会(編)『文明 21』17 号、pp.51-73
——　2009a「現代中国の葬儀―「殯儀館」を中心に」、諏訪春雄(編)『アジア遊学』、No.124、勉誠出版、pp.158-167
——　2009b「「死」をめぐる革命と民間知識―陝西省中部地域の公共墓地産業と葬儀改革を事例として」、韓敏(編)『革命の実践と表象―現代中国への人類学的アプローチ』、風響社、pp.215-250
——　2010a「ふたつのタイプの葬送儀礼からみた現代中国における「死」の位置づけに関する報告―陝西省中部地域における都市部と農村部の葬儀を事例として」、七隈史学会(編)『七隈史学』No.12、pp.27-42
——　2010b「現代中国における墓碑の普及と「孝子」たち―陝西省中部農村の事例から」、小長谷有紀、川口幸大、長沼さやか(編)『中国における社会主義的近代化―宗教・消費・エスニシティ』、勉誠出版、pp.87-121
——　2014a「近現代中国における「正しい」葬儀の形成と揺らぎ―二つの「聖なる天蓋」とその後の展開」、愛知大学現代中国学会(編)『中国 21』Vol.41、pp.175-202
——　2014b「民衆の葬儀と国家―近現代中国における人々の葬儀」、国立歴史民俗博物館、山田慎也、鈴木岩弓(編)『変容する死の文化:現代東アジアの葬送と墓制』、東京大学出版会、pp.173-200
——　2014c「従生活話語来看“歴史”記憶―以陝西同治回民起義為例」、韓敏、末成道男(編)『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態―東亜人類学者的理論探索』、National Museum of Ethnology.Vol.90, pp.255-269
——　2015a「中国における火葬装置、技術の普及と労働現場の人類学:新たな技術を受容し、環境を再構成する人々に着目して」、韓敏(編)『中国社会における文化変容の諸相:グローカル化の視点から』、風響社、pp.51-76
——　2015b「近現代中国における「歴史記憶」の形成過程に関する文化人類学的研究―陝西省中部地域における烈士記念の事例から」、JFE21 世紀財団(編)『アジア歴史研究報告書』2014 年度版、pp.109-132
中共西安市委党史研究室(編)　1993『堅守西安』、中共西安市委党史研究室
中国人民政治協商会議、陝西省西安市委員会文史資料研究委員会(編)　1987『西安文史資料』11 輯、中国人民政治協商会議陝西省西安市委員会文史資料研究委員会
仲富蘭　2012「試論喪葬文化資源的保護與利用」上海濱海古園葬文化研究所(編)『濱海論叢』、上海濱海古園葬文化研究所、pp.54-68

趙海　2000「中国殯葬管理耕作報告：現状、問題與対策」、時正新(主編)『中国社会福利與社会進歩報告(一九九九)』、社会科学文献出版社、pp.202-218
張剣影　1987「革命公園与万人冢」、中国人民政治協商会議西安市委員会文史資料研究委員会(編)『西安文史資料』11 輯、pp.120-122
陳岳良　2003「撫今追昔話宝興」、朱金龍(主編)『殯葬文化研究』23 期、殯葬文化研究編集部、pp.32-33
陳華文、陳淑君　2008『呉越喪葬文化』、華文出版社
陳祖恩　2007『尋訪東洋人:近代上海的日本居留民(1868－1945)』、上海社会科学院出版社
鄭暁江、徐春林、陳士良　2012『中国殯葬文化』、上海文化出版社
丁凌華　2000『中国喪服制度史』、上海人民出版社
田克恭　1987「在西安被圍的日子里」、中国人民政治協商会議西安市委員会文史資料研究委員会(編)『西安文史資料』第 11 輯、pp.63-78
董敬畏　2014『儀式社会與結群―以 S 村喪葬儀式為例』、世界図書出版公司
床呂郁哉　2006「変容する〈空間〉、再浮上する〈場所〉―モダニティの空間と人類学」、西井涼子、田辺繁治(編)『社会空間の人類学―マテリアリティ・主体・モダニティ』、世界思想社、pp.65-90
中生勝美　1999『中国村落の権力構造と社会変化』、アジア政経学会
聶嫄媛(整理)　2006「50 年風雨歴程、鋳就輝煌今朝―全国推進火化情況概述」、朱金龍(主編)『殯葬文化研究』39 期、殯葬文化研究編集部、pp.15-19
聶芝軒　1963「為紀念堅守西安死難軍民創建革命公園経過」、中国人民政治協商会議陝西省委員会(編)『陝西文史資料選輯』第 3 輯、pp.130-133
聶莉莉　1992『劉堡―中国東北地方の宗族とその変容』、東京大学出版会
任万珍　1988「旬県、彬県一帯農村的“孝義会”和“花紅会”」、中国人民政治協商会議陝西省咸陽市委員会文史資料研究委員会(編)『咸陽文史資料』4 輯、pp.213-214
白国琴(主編)　2003『従旧婚喪嫁娶到新礼儀風俗』、四川人民出版社
樊自升　1986「魚池村的“孝義会”」、 中国人民政治協商会議陝西省洛南県委員会、文史資料研究委員会(編)『洛南文史』4 輯、pp.55-56
フリードマン、モーリス(末成道男、西澤治彦・小熊誠　訳) 1991(1958)『東南中国の宗族組織』、弘文堂(初出は、*Lineage Organization in Southeastern China*, Athlone Press)
――　(末成道男　訳)　1991(1963)「社会人類学における中国研究の位置」、(末成道男、西澤治彦・小熊誠訳)『東南中国の宗族組織』、弘文堂、pp.201-228 (初出は A Chinese Phase, in Social Anthropology, *British Journal of Sociology*,Vol.14.No.1)
北京市人民委員会　1964「北京市民政局関於停用火葬場另建新火葬場請示」(一九六四民辦李字第八〇号文書)
包全大(口述)、陳婷婷(整理)　2005「上海殯葬単位的変遷」、朱金龍(主編)『殯葬文化研究』32 期、殯葬文化研究編集部、pp.86-87

北平市人民政府　1947「制定北平市殯儀館設置暫行規則暨北平市公墓及火葬場設置暫行規則」(第三十三号文書)
堀江俊一　1989「台湾の位牌祭祀」、渡邊欣雄(編)『環中国海の民俗と文化三－祖先祭祀』、凱風社、pp.172-192
ホワイト、マーティン(西脇常記、長尾佳代子、神田一世　訳)　1994(1988)「中華人民共和国における死」、ジェイムズ・ワトソン、エヴリン・ロウスキ(編)『中国の死の儀礼』、平凡社、pp.307-332 (初出は James L.Watosn and Evelyn S.Rawski(eds), *Death ritual in Late Imperial and Modern China*, University of California Press, Berkeley)
本田洋　1993「墓を媒介とした祖先の＜追慕＞：韓国南西部一農村におけるサンイルの事例から」、日本民族学会(編)『民族学研究』52 巻 2 号、pp.142-169
万建中、李少兵　2008『中国民俗史(民国巻)』、人民出版社
宮崎市定　1995(1961)「中国火葬考」、礪波護(編)『中国文明論集』、岩波書店、pp.221-254 (初出は塚本博士頌寿記念会(編)『仏教史学論集:塚本博士頌寿記念』)
民政部　1985「民政部関於貫徹執行『国務院関於殯葬管理暫行規定』的通知」、民(八五)13 号、2 月 26 日
民政部 101 研究所(編)　2001『中華人民共和国殯葬工作文献匯編』、民政部 101 研究所
――　2010　『中国殯葬事業発展報告(2010)』、社会科学文献出版社
民政部職業技能鑑定指導中心(編)　2006『遺体火化師(基礎知識五、四、三級技能)』、中国社会出版社
民政部人事教育司(編)　1996『民政部幹部培訓系列教材：殯葬管理』、中国社会出版社
村上興匡　2001「中江兆民の死と葬儀―最初の「告別式」と生の最終表現としての葬儀」、東京大学文学部宗教学研究室(編)『東京大学宗教学年報』19 号、東京大学文学部宗教学研究室、pp.1-14
毛沢東　1966(1944)「為人民服務」、『毛沢東選集』第 3 巻、人民出版社(初出は、1944 年の講話)、pp.954-955
森茂　1999「世界の葬送・墓地に関する法律(三)―ギリシア、中国」、明治薬科大学研究紀要編集委員会(編)『明治薬科大学研究紀要』(人文科学・社会科学)29 号、明治薬科大学、pp.91-117
――　2001「世界の葬送・墓地に関する法律(五)―中国」、明治薬科大学研究紀要編集委員会(編)『明治薬科大学研究紀要』(人文科学・社会科学)31 号、明治薬科大学、pp.95-105
――　2002「世界の葬送・墓地に関する法律(六)―中国」、明治薬科大学研究紀要編集委員会(編)『『明治薬科大学研究紀要』(人文科学・社会科学)32 号、明治薬科大学、pp.71-85
森田敦郎　2013『野生のエンジニアリングータイ中小工業における人とモノの人類学』、世界思想社
八木澤壯一　2010「中華人民共和国における殯葬事業の経過と現象についてー中国殯葬事

業発展報告の発刊と中国との交流を契機に」、火葬研究協会(編)『火葬研究』14 号、火葬研究協会、pp.34-37
山本恭子　2012「江蘇省における現代の葬礼―宿遷市、連雲港市、南京市の調査から」、金沢大学人間社会研究域付属国際文化資源研究センター(編)『文化資源学研究』4 号、金沢大学人間社会研究域付属国際文化資源研究センター、pp.57-67
――　2014「現代中国における葬礼習俗の変化と伝統継続の担い手―江蘇省北部地域における聞き取り調査から」、愛知大学現代中国学会(編)『中国 21』41 巻、pp.111-132
――　2015『中国における葬礼の地域差と歴史的変化―伝統の継承と変容』、金沢大学博士論文、未出版
熊伯蘅、王殿俊　1941『陝西省土地制度調査研究』、国立西北農学院農業経済系
熊伯蘅、萬建中　1942『陝西農業経済調査研究』、国立西北農学院農業経済系
楊根来、張国運、程新明　2001『殯葬管理教程』、中国三峡出版社
横山廣子　2005「葬礼改革と民族文化―雲南省大理市のペー族の農村における公共墓地の導入」、愛知大学国際中国学研究センター(編)『激動する世界と中国―現代中国学の構築に向けて第 1 部』、愛知大学国際中国学研究センター、pp.214-221
吉澤誠一郎　2003『愛国主義の創成　ナショナリズムから近代中国をみる』、岩波書店
羅梅君　(Leutner, Mechthild)(王燕生、楊立、胡春春 訳、周祖生　監訳)　2001(1989)『北京的生育婚姻和喪儀―十九世紀至当代的民間文化和上層文化』、中華書局出版(初出は *Geburt, Heirat und Tod in Peking: Volkskultur und Elitekultur vom 19*. Jahrhundert bis zur Gegenwart, Reimer)
陸章灝　2003「関於『簡辦喪事』到『文明喪事』的思考」、上海殯葬文化研究所(編)『上海国際殯葬服務学術研討論文集』、上海殯葬文化研究所、pp.43-46
李宗白　1985「揺銭会」、陝西省洛南県委員会、文史資料研究委員会(編)『上洛文史』3 輯、pp.36-39
渡邊欣雄(編)　1989『祖先祭祀:環中国海の民俗と文化 3』、凱風社
渡邊欣雄　1991『漢民族の宗教　社会人類学的研究』、第一書房
――　2001「中国の墓地造営と「青山白化問題」―温州リポート」、民俗文化研究所(編)『民俗文化研究』2 号、民俗文化研究所、pp.55-61
ワトソン、ジェイムズ(西脇常記、長尾佳代子、神田一世　訳)　1994(1988)「中国の葬儀の構造―基本の型・儀礼の手順・実施の優位」、ジェイムズ・ワトソン、エヴリン・ロウスキ(編)『中国の死の儀礼』、平凡社、pp. 17-32(初出は、James L.Watson and Evelyn S.Rawski(eds), *Death ritual in Late Imperial and Modern China*, University of California Press, Berkeley)
――　(末成道男　訳)　1990「祖先殺し―広東人の祖先祭祀にみられる力と敬意」、末成道男(責任編集)『文化人類学 8：中国研究の視角』、アカデミア出版、pp.63-73
ワトソン、ルービー(西脇常記、長尾佳代子、神田一世　訳)　1994(1988)「死者を記憶に

とどめること―東南中国の墓と政治」、ジェイムズ・ワトソン、エヴリン・ロウスキ(編)『中国の死の儀礼』、平凡社、pp. 229-254（初出は、James L.Watson and Evelyn S.Rawski(eds), *Death ritual in Late Imperial and Modern China*, University of California Press, Berkeley)

< 英語 >

Ahern, Emily. M　1973.*The Cult of Dead in a Chinese Village*, Stanford University Press

Davies, Douglas J & Mates, Lewis H　2005.*Encyclopedia of cremation*, Ashgate

Duara, Prasenjit 1988. Superscribing symbols: The myth of Guandi, Chinese god of war, *The Journal of Asian studies* Vol.47,No.4, The Association for Asian studies Inc,pp.778-795.

――　1995.*Rescuing history from the nation: Questioning narratives of Modern China,* The University of Chicago Press

Grainger, Hilary J 2005.*Death Redesigned- British Crematoria History, Architecture and Landscape*, Spire Books Ltd

Harrell, Stevan　1976.The ancestors at home: Domestic Worship in a Land-Poor Taiwanese Village, William Newell(ed)*Ancestors*, The Hague,pp.373-385.

Hutchins, Edwin 1990. The technology of team navigation, Jolene Gallagher, Robert E Kraut, Carmen Egido (eds), *Intellectual teamwork : social and technological foundations of cooperative work*, L. Erlbaum Associates, pp.191-220

Jackson, Jonathan. C 2008. *Reforming the Dead: The intersection of socialist merit and agnatic descent in a Chinese funeral home*, UMI Dissertation Publishing

Jankowiak, William 1993. *Sex, death, and Hierarchy in a Chinese City: An Anthropological Account.* New York: Columbia University Press

Jordan, David. K 1972. *Gods, ghosts and ancestors: The folk religion of a Taiwanese Village,* University of California Press

Kipnis, Andrew 1995. Within and Against Peasantness: Backwardness and Filiality in Rural China, *Comparative Studies in Society and History*,Vol.37.No.1, pp.110-135

――　1997. *Producing Guanxi: Sentiment, Self, and Subculture in a North China Village,* Duke University Press

Lane, Christel 1981. *The rites of Rulers-Rituals in Industrial Society- The Soviet Case*, Cambridge University Press.

Mauss, Marcel (Lussier,Dominiqu 英訳)2006(1947). Technology(1935/1947), Schlanger, Nathan(ed), *Techniques, Technology and Civilization*. Durkheim Press, pp.97-140 (英訳底本は Mauss, Marcel, *Manuel d'ethnographie*,Payot,second edition pp.29-83)

Oxfeld, Ellen 2004.When you drink water, think of its source: morality, status, and reinvention in rural Chinese funerals, *The Journal of East Asian Studies,*Vol.64,No4, pp.961-990.

—— 2010.*Drink Water, but Remember the Source; moral discourse in an Chinese village*, University of California Press.

Thompson, Henry 1899. *Modern Cremation: Its history and practice to the present date*. M.B.Lond

Ward, Barbara 1989(1968). Varieties of Conscious Model: The Fisherman of South China, *Through Other Eyes: an anthropologist's view of Hong Kong*, Hong Kong: Chinese University Press, pp.41-60（初出は Michael Banton(ed),*The Relevance of Models for Social Anthropology*, London: Tavistock publications,pp.113-137）

Watson, James 1982. Of flesh and bones: the management of death pollution in Cantonese society, Bloch, Maurice & Parry Jonathan(eds), *Death and the regeneration of life*, Cambridge University Press,pp.155-186,

Watson, Rubie 1994. Making secret histories: Memory and mourning in Post-Mao China, Rubie S. Watson(ed), *Memory ,history, and opposition under state socialism*, School of American Research Press, pp.65-85

Weller, Robert 1984. Social Contradiction and Symbolic Resolution: Practical and Idealized Affines in Taiwan, *Ethnology* Vol.23 No.4, University of Pittsburgh, pp.249-260

Whyte, Martin and Parish, William 1984. *Urban Life in Contemporary China*, University of Chicago Press.

Wolf, Arthur P 1974. Gods, Ghosts, and Ancestors, Arthur Wolf(ed) *Religion and Ritual in Chinese Society*, Stanford University Press,pp.164-168.

Yan, Yunxiang 1997. The Triumph of Conjugality: Structural Transformation of Family Relations in a Chinese Village, *Ethnology,* Vol.36, No.3, University of Pittsburgh,pp.191-212

—— 2003. *Private life under Socialism; Love, Intimacy, and Family Change in a Chinese Village 1949-1999*, Stanford University Press.

—— 2009 *The individualization of Chinese Society,* LSE monographs on social anthropology,Vol.77 ,Berg

※ その他、各種の行政文書については、下記の図書館、檔案館所蔵のものを利用した。

渭南市檔案館

渭南市臨渭区図書館

咸陽市檔案館

咸陽図書館

上海市檔案館

上海図書館

西安市檔案館

西安図書館
陝西省檔案館
陝西省図書館
中国国家図書館
北京市檔案館
蒲城県檔案館